令和３年度 第１回 荒尾市総合教育会議 会議録

１．日　　時　　令和３年９月28日（火）午後２時～午後４時

２．場　　所　　荒尾市役所　市長公室

３．出 席 者

	荒尾市長	浅田　敏彦
	荒尾市教育長	浦部　眞
	荒尾市教育委員	旭田　國浩
	荒尾市教育委員	渡邊　義専
	荒尾市教育委員	深浦　淳美
	荒尾市教育委員	谷本　ひとみ
（オブザーバー）	副市長	田上　稔
（事務局職員）	総務部長	石川　陽一
	文化企画課長	中山　創
	総合政策課長	田川　秀樹
	総合政策課政策推進室長	奥村　猛
	総合政策課政策推進室	丸本　真由子
	教育審議員兼学校教育課長	村上　豊優
	教育次長兼教育振興課長	橋本　張幸
	学校教育課指導主事	溜渕　知昭
	学校教育課指導主事	池田　祐樹
	学校教育課指導主事	米村　光生
	教育振興課長補佐兼学務係長	畑山　鉄也
	教育振興課教育政策係長	吉村　麗月
	生涯学習課長	宮脇　浩司
	生涯学習課社会教育係長	馬場　理恵子
	生涯学習課スポーツ推進係長	前田　恵子

４．傍聴者　　無し

５．議事
（１）いじめ問題について
（２）不登校問題について
（３）学力向上について
（４）次期教育大綱の策定について

６．議事経過の概要
　以下のとおり

○議事経過の概要

１．開会

田川総合政策課長が、開会の宣言、配付資料の確認を行った。

２．市長挨拶

浅田市長が、挨拶を行った。

＜挨拶要旨＞

本市でも８月から９月にかけて、新型コロナウイルスの感染者が増加した。本来は、夏休みも終わる９月から授業が始まるというタイミングで、通常の授業ができない状況となり、分散登校やオンライン授業を取り入れながら学校がスタートした。しかし、本市では、県内で６自治体のみ整備している LTE 型のタブレット端末を導入していた効果もあり、オンライン授業を行うことができた。初めての試みで、先生方は大変だったと思うが、子どもたちの学習の保障をしていただき、感謝申し上げたい。

新しい時代に対応した教育として ICT を活用していくことは、様々な困難に気付き、解決する手段を考え、それをまとめて発表する力につながる。今回のオンライン授業は、子どもたちにとって将来性のある授業になったと思う。私自身、ICT は、様々な利活用の可能性があると考えている。

今年度の総合教育会議から、会議の在り方を見直した。教育行政の内容は幅広いものであるが、中でも学校教育の重要性が高い。そこで、出来るだけ学校教育に特化した形で、具体的なテーマを設定し、そのテーマに沿った意見交換をしながら、今後の教育行政の在り方について考えていきたい。

３．総合教育会議について

田川総合政策課長が、総合教育会議の概要について説明した。

４．オンライン授業の様子について

市内小中学校において実施されたオンライン授業の様子について、浦部教育長の説明のもと、動画を視聴した。

＜感想等＞

深浦委員	先日、万田小学校にオンライン授業の様子を拝見しに行った。子どもたちは、タブレットを見ながら真剣に授業を受けていて感動した。
旭田委員	荒尾市で LTE 回線を採用していただいて、大変有難い。近

	隣市ではオンライン授業ができる環境ではなかったため、分散登校等で対応したと聞いた。
浅田市長	どうしても費用はかかるが、家庭での Wi-Fi 環境等の差により、オンライン授業を受けられる子どもと受けられない子どもが出ないようにしなければならない。誰一人も取り残さないという観点から、本市では全ての子どもたちがオンラインでつながれるよう整備した。 オンライン授業がこんなに早く実現できるとは思ってなかったが、先生方の大変な努力のおかげで、新学期のスタートを切ることができた。

５．議事

（１）いじめ問題について

資料１に基づき、主に本市で発生したいじめ問題に係る今後の対応方針について、浦部教育長が説明を行った。

＜主な意見等＞

浅田市長	今後、二度とこのようなことを起こさないことが課題になってくる。普段から、生徒同士や先生と生徒の信頼関係、苦しい時に相談ができる環境づくりが重要である。また、SNS に関してのトラブルは全国的に多く、マナーも含めた使い方について大人が教えていかなければならない。本市はスマートシティを推進しており、これからのデジタル社会に向けて、年配の方にもデジタルの便利さや効果的な使い方を覚えていただきたいと考えている。その際に、例えば、子どもたちが先生役になって、地域のお年寄りに使い方を教えてあげれば、その子どもたちはきっと間違いを起こさないのではと考える。地域とのつながりを築く上においても、SNS や ICT を上手に使いこなすことで、子どもたちとお年寄りが良い関係を築くことができる。そういうことができるようになると素晴らしい。今後は、今回のいじめ問題の反省も込めながら、対応方針に基づき、再発防止に全力を尽くしていただきたい。
浦部教育長	本市は「人権の花咲くまち」を基盤に進められている。人権教育をベースにし、子どもたちの心を耕していくことをやっていきたい。また、子どもたちが地域や家庭の中で、リーダーシップを取っていくことで、子どもたちの中でもスマホに対する抑止力などが出てくるのではないかと考える
渡邊委員	日本の子どもたちは、「死ね」「死」という言葉を軽く使っている。どうしても「死」がタブー化されているため、死と向き合う教育が学校現場から遠ざけられている。「死」がどう

	いうものなのか、デスエデュケーションを視点に置き、命の価値、どう死と向きあって、どう自分が生きていかなければならないのかを子どもたちが学んでいける場が、荒尾市でも進んでいくことを願う。「死」を正しく理解できれば、「死ね」なんて言葉は絶対言えない。ぜひそういう教育を進めていただきたい。
浅田市長	例えば、子どもを葬儀に連れていき、死ぬということがどういうことなのか、悲しみやお別れなどを経験させることが重要だと考える。保護者の方々も、子どもだからと言わずに、子どものうちから死とは何かを理解させることで、「死ね」という言葉を使わないような子になると思う。
田上副市長	死に直面させるような教育をしてほしいという渡邊委員の要望だが、それを教育内容の中で取り入れることはできるのか。
浦部教育長	年間計画の中にある「命の大切さ」というところで盛り込んであるため、その中でやることはできる。授業だけではなく、日常の中で普段からやっていくべきではないかと思っている。例えば、国語の中でも命に関連する内容が出てくる。そのように日常の中で触れていき、あとは教える側が、どういう意識を持って、授業や日常生活に臨むかというところを、今後もっと高めていく必要がある。
田上副市長	第三者機関から５つの提言があり、それに基づいてこれからの学校現場に活かしていかれると思うが、その全般において、「生」や「死」に関する教育活動を目指すべきということでいいか。
浦部教育長	５つの提言とあるが、根底にあるのは命の大切さであり、昨年度起きたいじめの事案についても、非常に重く受け止めている。本日の話もしっかりと受け止めて取り組んでいく。
旭田委員	競馬場跡地や新図書館において、SNS を通じて地域と子どもが交流できるような場を作っていただきたい。
浅田市長	そのような視点は重要だと考えているため、これから様々な施設を具体的に検討していく中で、関係機関等と協議していきたい。

（２）不登校問題について

資料１及び参考資料３に基づき、本市における不登校の状況や課題、取組状況、今後の方針等について浦部教育長が説明を行った。

＜主な意見等＞

浅田市長　データを見ると、ハートフルルームがある第三中学校においても、市内の小中学校全体においても、不登校の生徒は減少してきており、成果につながっている。一人一人、学校に行きたくても行けない事情があり、その中で家でも学校でもない第三の居場所があるというのは、子どもたちの安心感につながる。第三中学校のハートフルルームの設置は、１つの大きなチャレンジであるが、効果も上がっているということで、残りの２校についても必要であれば設置していくべきだと感じた。
小岱教室については、施設が老朽化しており、今後どうしていくのかが課題である。場所を移転したほうが良いのか改修したほうが良いのか、どういう方法が一番良いのか教育委員会と意見交換しながら検討していきたい。

浦部教育長　最終的には、子ども目線で、子どもたちが目指す姿を支援できればと考えている。

田上副市長　親戚が、数年前フリースクールを立ち上げた。全国から不登校の子どもたちが来ているらしいが、SNS にアップされている写真を見ると、子どもたちの表情が非常に明るい。精神論にはなるが、そういう子どもたちの明るい笑顔が奥底にあると思って、諦めず気長に取り組んでいくべきだと強く感じている。

浦部教育長　子どもの明るさが、私たちの取組みをこのまま進めるべきかどうかの１つの指標になる。

谷本委員　コロナ禍において、子どもたちは我慢を強いられていると思う。大人としては些細なことでも、子どもとしては重大なことと捉え、メンタルが崩れてしまうこともある。コロナ禍が続いているため、そのような子どもが増える状況にあると思うが、荒尾市ではこれだけの成果が上がっている。子どもの送迎を行うということも、設備や人を揃えなければならないため、簡単に出来そうで出来ないことである。迎えに来てもらえる、１人じゃないという安心感を与えられる、そういう手厚い支援を受けられることは素晴らしい。広げていくべき取組みである。

旭田委員　四中においても、教室に入れない子どもがいるのを見かけた。担任の先生は、他にも見なければならない子どもがたくさんいるため、ハートフルルームのような専門の先生に指導いただき、徐々に教室に入れる体制づくりをお願いしたい。

浦部教育長　拡充するためには、人的配置が最大の課題である。昨年度、

	ハートフルルームを開設したが、県としても必要性は理解しているが、人的配置をすることは難しいとのことであり、市教育委員会で人と予算の確保を行った。
渡邊委員	不登校の子どもや親と関わっていく先生は、ものすごく大変な労力を必要とする。不登校の子どもだけではなく、他の大勢の子どもも見なくてはならず、負担が大きい。なぜその子が不登校なのかという原因究明と、それを解決する専門のスタッフを、非常勤ではなく常勤として各学校に配置することが非常に重要だと考える。
浅田市長	現在は非常勤なのか。
浦部教育長	現在は非常勤２名体制である。
浅田市長	何か資格が必要なのか。
浦部教育長	教員免許が必要である。
浅田市長	第三中学校のハートフルルームの成果を見ると、他校でも必要性は高い。予算面だけの問題なのか、人材確保の問題もあるのか、引き続き教育委員会と協議していきたい。
浦部教育長	教育委員会としても、引き続き県へ人的配置の要望をしていく。

（３）学力向上について

資料１及び参考資料３に基づき、全国学力学習状況調査の結果やその要因、学力向上についての取組み等について、浦部教育長から説明を行った。

＜主な意見等＞

浅田市長	学力向上については、教育における最重要課題だと認識している。全国学力状況調査の結果としては、少しずつ上がってきており、嬉しいことである。これを持続させることが重要であり、授業改善アドバイザーの先生のノウハウを学校の先生方に習得していただいたことで、今年から進化型のあらおベーシックに１歩前進できたと思う。点数だけに限らず、生徒自らが主体的に学ぶ意欲や自信をつけられるように、ぜひ取り組んでいっていただきたい。また、新しい図書館を核に有明高専や岱志高校、有明高校とも連携し、小・中・高と縦につながっていくことも重要な視点であり、ぜひ子どもたちには地元の学校に通ってもらいたい。新図書館には、余所にはない、図書館を核に学校とつながることができるという特

徴があるため、どんどん図書館を利用していただきたい。

浦部教育長　図書館の移転が決まってから、図書館の重要性について再認識した。これまで、図書館は本を借りに行くところ、催し物をするところ、会議をするところという概念にあった。それが、新図書館の様々な活用方法を知って、可能性がたくさん秘められていると感じた。まだまだ課題はたくさんあるが、オンライン授業も含めたところで、様々な取組みを行っていきたい。

浅田市長　全国学力テストの結果が載っている新聞記事を拝見したが、テストの点数は新聞を読む頻度との相関関係が、データで示されていた。デジタルの良さと新聞のようなアナログの良さがあり、世の中の情報を新聞から得ている子どもが、想像力や読解力が伸びるのではないだろうか。このように、客観的なデータが示されると、新聞を読む習慣が大事だと感じた。

浦部教育長　新聞については、昨年度から子ども未来基金で各学校に図書補助費として本や新聞を購入させていただいている。新聞に親しむことや読み込むことで、思考の幅を広げていけるのではないかと考えている。

谷本委員　小中学生が、子ども未来塾などの、有明高専、岱志高校、有明高校の生徒とともに学習する機会をもっと設けてほしい。ちょっとした経験ではあるが、少し高度な勉強に接する機会をもっと増やしてほしい。

渡邊委員　自分の子どもには、早いうちに荒尾で夢を見つけてほしいと思っている。そうすると、夢に向かって努力する。PTA主催で、緑ケ丘小学校でお仕事体験を行っていたが、荒尾市にも様々な職種があるため、どういう仕事があるのか、この仕事に就くにはこういう勉強をしなければならない、というのを子どもたちに教えてもらえるような取組みをしてもらいたい。

浅田市長　非常に重要な視点である。夢を持てるかどうかによって、そこに向かって頑張れると思うし、荒尾市民が生きがいをもって仕事に取り組む姿を見たり聞いたりすると、こんな仕事があるんだ、目標にしたいなという思いが芽生える。将来の選択肢を広げるためにも、行政としてもそのような取組みをサポートしていきたい。

深浦委員　学力向上という面では、先生方は一生懸命頑張っておられる。先生方が子どもたちに対して、きちんとした授業ができる余裕がなかなかないと聞く。先生方が、授業にしっかり取

り組める環境づくりも重要で、そのためにも何ができるかも考えていかなければならない。

谷本委員　高校生の進学や就職の際、重要視されることとして、これまでにどういう奉仕活動をしてきたか聞かれるため、荒尾市の子どもたちに勉強を教えたり一緒に活動したりすることは、高校生にとっても有利だと思う。また、その証明書や感謝状のようなものもあれば良い。

渡邊委員　あらおベーシックは子どもたちが主体性をもって学ぶというものであるが、万田小学校に行った際には、先生方が主体性をもって活発に動いていた。先生方がやりたいことを提案し、校長先生が承諾するという姿勢だった。先生方も働きやすく主体性をもって教えることができるならば、それが子どもたちにも響き、主体性をもって学ぶことができると思う。

浦部教育長　確かに万田小学校の先生方は、年度始めに比べると表情が違い、自分たちでアイディアを出し、自分たちで実行するという意識になってきている。学力向上としての数字ではまだ現れていないが、いずれはつながっていく想定で取組んでいく。

田上副市長　学力向上というテーマは、新しい教育大綱の核となる。学力向上のためには、行政と教育委員会との役割分担が明確になる分野である。条件整備を行うのが行政の役割、教育内容を充実するのが教育委員会になると思う。行政では、教育委員会の組織体制の強化、授業改善アドバイザーの予算化もしている。子どもたちの学力が上がると、市のまちづくりにもつながっていく。子どもたちも成績が上がると、自己肯定感が芽生え、好循環が生まれてくる。広い意味で、学力は重要な分野だと考える。これからも教育委員会の先生方と協議し、今の事業を継続すべきか改善すべきかの判断を行いたい。教育環境の整備は必須であり、役割分担しながらも、荒尾市としてこの課題には取り組んでいくべき大きなテーマだと考える。
また、学校の先生の働き方改革については、市で雇用できる非常勤の方は市で雇用し、先生方の負担を少しでも減らして、本来の仕事に専念してもらえるように考えている。

（４）次期教育大綱の策定について

資料２に基づき、教育大綱の位置づけや基本理念、基本方針等について、田川総合政策課長及び浦部教育長から説明を行った。

＜主な意見等＞

浅田市長	数値目標など点検評価がしやすい指標を設定していただきたい。

６．その他

その他として、田川総合政策課長が、今年度の総合教育会議は２回の開催を予定しており、次回は教育振興基本計画の策定前である３月頃に開催する旨を説明した。

７．閉会

田川総合政策課長が、閉会の宣言をした。